

1. オリンピックと土木
2. 「都市史」から
3. 本格化する建設業の海外進出ムード
4. 生物と無生物の間



1. 快晴に恵まれた開会식을皮切りに、オリンピック東京大会はどうか順調に進行している(10月17日現在)。競技場施設、道路、鉄道、交通規制などで建設界の協力と活躍は本誌1月号が紹介した。しかし、それら以外の場面でも本会会員が活動しているのは余り知られていない。ボートの国際審判員としての堀 武男氏、水泳連盟の施設委員長としてプール規格の元締めの高谷俊明氏、同じく水泳の機械審判主任としての伊丹康夫氏など、土木界でも活躍し、なお余暇の全力をオリンピックに注入しているといっておく。

「科学のオリンピック」といわれる東京大会では、計時の機械化、自動化が目撃されたが、水泳の場合、ゴールインのつぎの瞬間には 1/1 000 秒の計時がタイプで打ち出される装置——Full Automatic Electronics Judging Devices ——も使われている。伊丹氏はその装置の開発からの推進力の一人であり、今次大会では装置とともにプール サイドに頑張っている。100 m 自由型決勝での着順が取沙汰されたときも、この装置の性能が十二分に物をいったようだ。土木の世界で培われた科学と技術の素養が、他の分野でも尊重されているといっは大げさか。【C】

2. 「全人口の90%が稠密な居住形態をとる都市に集中し、都市生活が人類の基本的な生活様式となる時代が目前に迫っている。……そのために都市の構造を前代未聞のスケールで改造していかねばならない。……その対応にいきさかの遅滞があっても、大小さまざまな混乱をひきおこし、ひいては現代社会に危機をもたらす原因ともなりかねない」。京都大学の西山卯三と西川幸治は、連載「都市史」のはしがきでこう述べ、都市の本質を深く捕えるためには、「従来の都市建設技術に関するたゆみなき実験の蓄積ともいべき都市発達史の中に、ひそめられた人類の叡智を学び、都市の発展とその計画思想をともに考えたい」として、まず、中国の黄河流域の都市誕生をとりあげ考察している。

これから都市建設、地域開発を手がける土木技術者も、目前の対象にのみ捕われず、深く技術発展の思想を捕えようと、将来の計画を遠大に地道に立てねばならないであろう (月刊「建設者」10月号より連載、山海堂)。

【S】

3. 建設省は「建設業の海外進出は国際収支の改善と輸出入市場の確保に寄与するもので、特に東南アジア方面は将来有望な市場となる」とし、本格的で強力な保護助成策を練っていると伝えられる。国内の国造り工事が峠を越しつつある現在、実に時宜に適した喜ばしい動きというべきであり、建設アタッシュによる情報収集、半官半民の建設コンサルタント育成、法律および金融面での優遇、研修制度の拡張と適切な手段が計画されているようである。しかし、わが国の固有技術推進という面にも重点がおかれ、研修生に講義しているとき胸をはって日本の技術を説けるようにならないと、せつかくの海外進出ムードもうわついたものになってしまう恐れがある。こういった面でも官民一体となった大きい運動の盛上ることが望まれていると思われる。

【J】

4. 「パナマ運河開きくの明暗は黄熱の対策いかんと深い関係を持っていたことも記憶に値する事実です。19世紀の末スエズでの成功の余勢をかって、パナマに挑んだフランスの不幸な失敗と、そのあとをうけたアメリカ人の成功は工学の問題であるより前に衛生学の問題であったのでした」という文章を、土木とは関係のない、と思っていた「生物と無生物の間——ウィルスの話——(岩波新書)で読んだときの驚きは大きかった。研究社の「新簡約英和事典」によれば Civil とは市民の、公民の、文明のとある。市民の生活の工学 Civil Engineering に課せられたこの使命を完成させるためには、ただ、ひたすらに工学のみを追うことなく、大きく知識を求めてやまぬ精神は必要であろうことを再び教えられた思いがした。……これは今日でも生きていることであろう。

【E】